

## 法顯の行路（下の二）

堀 謙 徳

### 第十 巴連弗より多摩梨帝に至る

法顯は拘陁彌より波羅奈城に歸り、東行して再び

巴連弗邑即ち今のバトナ市 (Patna) に達す。法顯は

本と律藏の原本を求めて印度に入り、北印度にある

や、之を搜索したれども、この地方にては、口傳に

て之を弟子に授くるのみにして、律の寫本を得ず、

法顯が巴連弗邑にあるに當り、大乘派の一寺院に於

て『摩訶僧祇律』を得て之を寫せり、『摩訶僧祇律』

は大衆部の律にして、法顯が歸朝の後、覺賢と共に

之を漢譯し、四十卷となし、現に藏經に之を收む、

この外に『雜阿毘曇心論』、『方等泥洹經』、『摩訶僧祇

阿毘曇』を得て之を寫せり、『雜阿毘曇心論』は法救

の作にして、劉宋時代衆鑑等の漢譯十一卷の原本な

るが如く、『方等泥洹經』は法顯譯の『大般涅槃經』  
六卷の原本なるべく、『摩訶僧祇阿毘曇』は大衆部  
の論藏に屬する書なること一見明なれども、現存漢  
譯藏經中の何れの書に當るや詳ならず、法顯は巴連  
弗邑に留ること三年の久きに互り、梵語梵文を研究  
して大に得る所あり。

法顯は巴連弗邑の留學を終り、恆河に沿ひ東に下  
ること十八由延（一四四哩）にして瞻波國 (Campā)  
即ち今の Bhagalpur 附近に至る、瞻波は佛陀在世の  
とき、屢々留錫せし地にして、佛蹟寺院等には、法顯  
時代尙ほ僧侶の在るあり。是より東行約五十由延（四  
〇〇哩）を以て多摩梨帝國 (Tamilaput) 即ち今日の  
Tamil に達す、此地は恆河河口の支流 English 河  
の沿岸にありて印度洋航行の船舶が往復する海港な  
るか、法顯の當時市内に二十四ヶ所の寺院あり、佛  
教盛大なるを以て法顯は留りて經論佛像を寫すこと  
二年に及べり。

## 第十一 師子國

法顯は多摩梨帝港より商船に乗り、西南に向ふてベンゴール灣を航行すること十四日にして師子國即ちシーロン島に至る。當時師子國の佛教盛大にして、

國內の僧侶六萬餘人あり、無畏山 (Abhaya-giri) 摩訶毘訶羅 (Maha Vihara) の二大寺は各派の本山たる位置を有す、無畏山は首府アヌラダ城 (Anuradhapura) の北に在り、五千人の僧之に住し、堂塔伽藍甚だ美麗なり、摩訶毘訶羅は首府の南に在り、三千人の僧之に住し、建築莊嚴人目を驚かすものあり。

法顯は師子國に留ること二年、この間に『長阿含經』、雜阿含經』の原本を得、『彌沙塞律藏』を寫し、更に一部の雜藏本をも得たり。『長阿含經』は姚秦の世、佛陀耶舍、竺佛念共譯二十二卷本の原本なるべく、『雜阿含經』は劉宋の世功徳賢之を譯して五十卷本となせり。『彌沙塞律藏』とスへるは、彌沙塞部 (Māṅśās)

ata) 即ち化地部に傳へたる律にして、劉宋の世、佛陀什、竺道生等が漢譯せし『彌沙塞部和醜五分律』三十卷本の原本たり、一部の雜藏本とは何れの書に當るや明ならず。

## 第十二 耶婆提

法顯は一大商船に塔して師子國を發す、同乗の船客二百餘人、東航三日にして暴風雨に會ふ、風雨止まざるること十三日、一島邊に於て船體の損處を塞ぎ、更に洋中に進行したるが、東西を識別すること能はず、僅に天體を見て進み、風雨至れば漂流し、前後九十日漸く耶婆提 (Yava-dvīpa) に着す、印度古語の y が變化して俗語の j なること多く、Yamma が Jamma となるが如く、Yava は今 Java の島名となる、而して提は閩浮提 (Tambudvīpa) の提に同じく dvī の音を寫せり、梵語の dvīpa は島・洲の義なれば耶婆提は耶婆島即ちジャバ島なること疑なし。法

顯時代のジャバ島には外道多くして佛法は殆んど言ふに足らざる少數の信者あるに過ぎず、後代ジャバ島に佛教盛大となりしは法顯時代より二百年の後にあり、法顯はジャバに留りて支那行の商船を待つこと五ヶ月に及べりと雖も、佛教に就ては唯だ「佛法不足言」の一句を示すのみ。

### 第十三 支那海航行

西曆四百十四年、四月十六日(陰曆)一大商船に乗り支那の廣州(今の廣東)に向て出帆す、廣州は南支那の海灣、南方諸國に對する通商の關門なればなり法顯と同乗する者約二百人、多くは商人なり、船上五十日間の食料を積む。耶婆より東北に進航すること一ヶ月餘にして支那海に於て暴風雨に會ひ、是より連日陰雨を降らし、耶婆出發より七十餘日を経て、尙ほ陸地に到着せず、食料盡さんとして乗客の苦痛甚し、乃ち西北に航進し陸地を求むること十二日、即ち耶婆出發より八十二日にして、

遂に青州長廣郡牢山の南岸に安着したり、この地は今の獨逸租借地膠州灣の附近に位し、山東半島の南部にあり、時に東晋の安帝義熙十二年陰曆七月十四日なり。

### 第十四 在外十五年

法顯は姚秦の弘始元年(西曆三九九)長安を發し、六年の間西域及び北印度を歴遊して中印度に達し、滞在すること六年、中印度より各國を経て青州に至るまで三年を費し、前後在外十五年の久しきに及ぶ、其間の苦心名狀すべからず、尋常の探險家なれば中途にして其命終りたるべしと雖も、法顯が愛法の信仰力によりて始めて之を全うするを得たり、法顯入竺の結果は幾多の經典を傳へ、後代の佛者を奮起せしめ、多數の入竺者を出せり、就中唐代の玄奘・義淨の如き其重要なる者なり。(完)